

HPVワクチンなどのワクチン接種後に生じる 種々の症状についての調査とその対応方法に関する 研究報告（第2報）

愛知医科大学 疼痛緩和外科

愛知医科大学病院 疼痛緩和外科・いたみセンター

西原 真理

ワクチン接種後に生じる種々の症状についての調査とその対応方法に関する研究 (令和5年度～令和7年度)

厚生労働行政推進調査事業費補助金 研究代表者：西原真理 愛知医科大学医学部教授

概要

- ブロック拠点病院を受診した患者の症例についての情報収集システムを構築
- HPVワクチン以外のワクチンでも同様の症状が起こっているかどうかの予備的検討
- HPVワクチン接種後の健康障害について、症状の改善が見られた症例の調査
- 「HPVワクチン接種後に生じた症状に関する診療マニュアル」のブラッシュアップ

目的

HPVワクチン接種後の症状を訴える人へのサポートの実態と臨床像把握

方法

患者プロフィール、自覚症状、他覚所見、心理社会環境、検査所見、治療経過等に関する問診チェックシートを使用して、HPVワクチン接種後に健康障害が生じてブロック拠点病院を受診した患者を診察した医師が研究班に報告する。

対象

北海道大学、東北大学（※）、新潟大学、福島県立医科大学（※）、富山大学、順天堂大学、横浜市立大学、愛知医科大学、京都府立医科大学、大阪医科大学、高知大学、岡山大学、九州大学

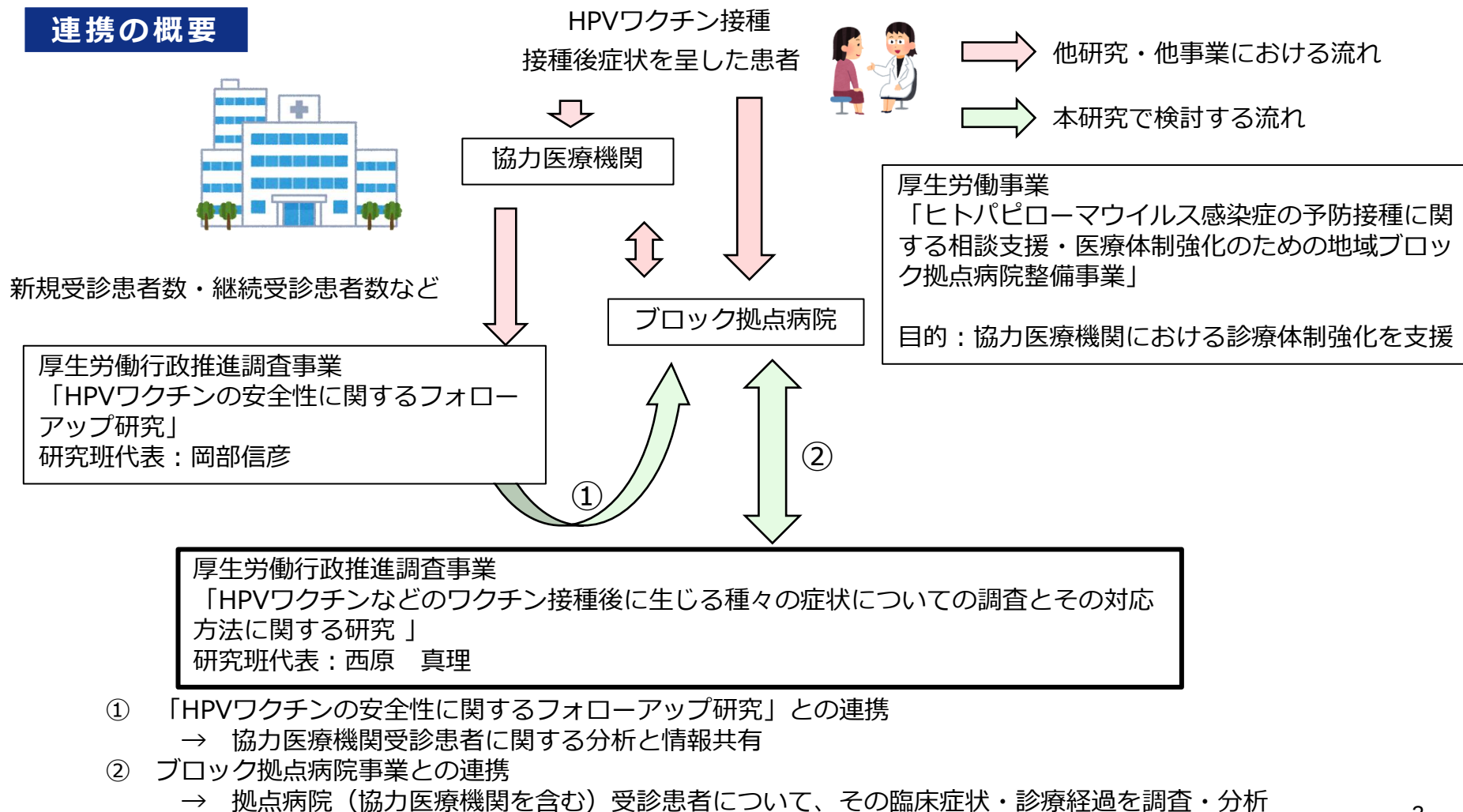
※ 令和6年度中に東北ブロックにおけるブロック拠点病院が福島県立医科大学から東北大学へ変更となっている。

→ ブロック拠点病院を受診した患者の症例についての情報収集システムを構築したため、令和6年4月～令和7年3月までの症例について報告する。

本研究と他の研究・事業との連携について

本研究は、厚生労働行政推進調査事業費補助金「HPVワクチンの安全性に関するフォローアップ研究」（研究班代表：岡部信彦）厚生労働事業「HPV感染症の予防接種に関する相談支援・医療体制強化のための地域ブロック拠点病院整備事業」と連携し、実施している。

連携の概要



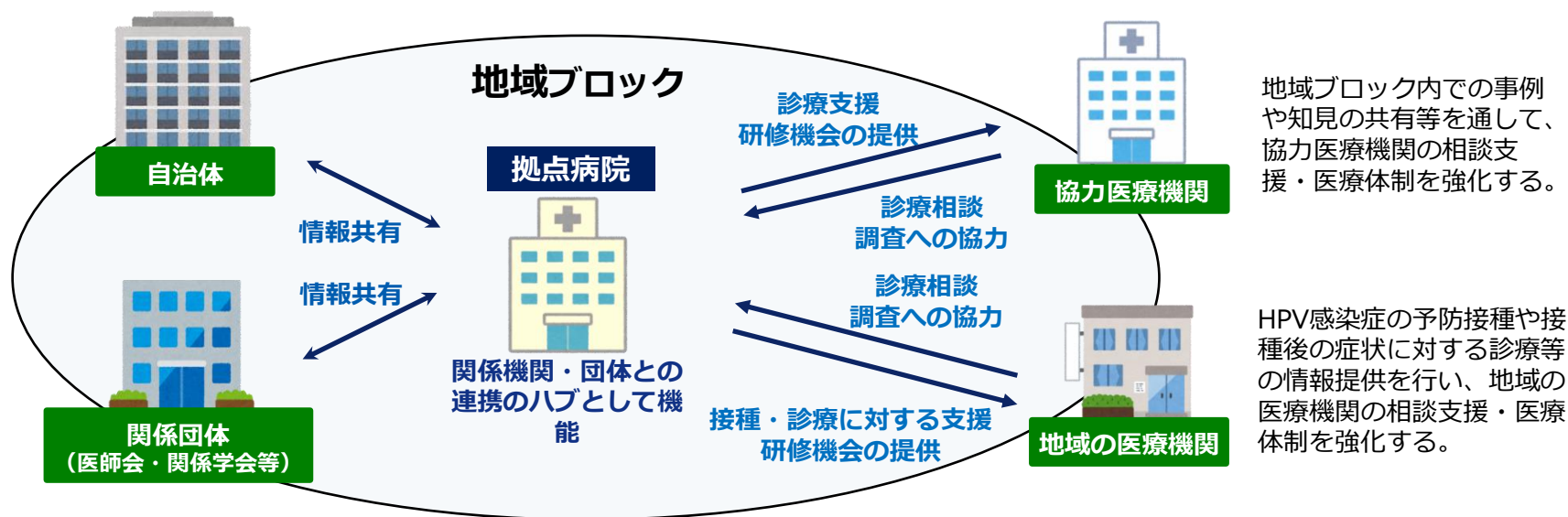
HPV感染症の予防接種に関する相談支援・医療体制強化のための 地域ブロック拠点病院整備事業（概要）

目的：ヒトパピローマウイルス（HPV）感染症の予防接種を進めるにあたって、協力医療機関の中から、地域ブロック別に拠点病院を設け、HPV感染症の予防接種に関する相談支援・医療体制の強化を図る。

事業内容

日本全国を10ブロックに分け、地域ブロック別に拠点病院（1～2医療機関）を選定する。拠点病院は、医療機関・自治体・関係団体等との連携のハブとして、下記のような役割を担う。

- 協力医療機関や地域の医療機関との連携を構築し、研修会等の実施を通して、協力医療機関の診療支援・地域の医療機関に対する情報提供を行い、よりよい診療体制の構築に寄与する。
- 都道府県・市町村・医師会・学校関係者・予防接種センター等との連携を構築し、情報共有を行う。



注）協力医療機関とは、ヒトパピローマウイルス感染症の予防接種後に生じた症状の診療に係る協力医療機関を指す。

令和6年度にブロック拠点病院を受診した症例の概要について

令和6年4月から令和7年3月までにブロック拠点病院を受診した患者のうち、臨床経過の情報を収集できた90人を報告する。
そのうち、接種時に何らかの症状があったと確認されたのは52人/90人であった。
また、受診のきっかけとなる症状は77人/90人が接種から1か月以内に出現していた。

結果概要

【患者背景】

- 年齢 19.5歳（13－27歳）
- 接種回数
初回：61人、2回目：20人、3回目：9人

【接種時～症状出現】

- 接種時の様子（受診のきっかけとならない症状をも含む）

何らかの症状があった	： 52人
痛み	： 52人
急性ストレス反応（動悸、過呼吸など）	： 2人
血管迷走神経反射（失神など）	： 3人
- 接種から受診のきっかけとなる症状出現まで

1ヶ月以内	： 77人
1ヶ月以上	： 13人

令和6年度にブロック拠点病院を受診した症例の概要について

最も頻度が高い自覚症状は「疼痛及び感覚の障害」であり、62人/90人に認められた。

他覚所見又は検査異常が確認されたのは、30人/90人であった。

薬物療法、肩関節腔内注射、理学療法・作業療法、鍼灸、臨床心理士による介入等がなされていた。

結果概要

【症状・所見】

- ・ 自覚症状
 - 疼痛及び感覚（光・音・におい）の障害 : 62人
 - 運動障害 : 27人
 - 自律神経障害 : 16人
 - 認知機能障害 : 2人
- ・ 他覚所見あり、または検査異常あり : 30人
 - 関節の可動制限、筋力低下、蕁麻疹、アロディニア、腱反射亢進、
筋肉内や滑液包周囲の炎症性変化を示唆する画像所見、フェリチン低値など
- ・ 診断名
 - 肩関節部周囲炎、片頭痛、起立性調節障害、筋筋膜性疼痛症候群、左上腕三頭筋炎の疑い、
蕁麻疹、左肩滑液包炎、鉄欠乏性貧血など
- ・ 【治療内容】（ワクチン接種後の症状と関係のない他の特定の疾患に対する治療は除く）
 - 薬物療法：NSAIDs、アセトアミノフェン、ミロガバリンベシル酸塩、漢方薬（補中益気湯など）
メコバラミン、副腎皮質ステロイド、トラネキサム酸、ベタヒスチンメシル酸塩など
 - それ以外の治療：肩関節腔内注射、外用薬処方、理学療法・作業療法、鍼灸、臨床心理士による介入など

令和 6 年度にブロック拠点病院を受診した症例の概要について

令和 6 年 4 月から令和 7 年 3 月までにブロック拠点病院を受診した患者で臨床経過の情報を収集できた症例のうち、症状が消失又は改善したのは66人/90人であった。

結果概要

【経過】

- 症状の経過
 - 消失 : 10人
 - 改善 : 56人
 - 不変 : 4人（＊）
 - 不明 : 20人
- 症状出現後 3 か月以上の経過をフォローできた症例 : 73人
 - 3 か月以上症状が持続していることが確認できた症例 : 18人
 - 3 か月以内に症状が消失または改善していることが確認できた症例 : 55人

【（＊）不変であった 4 人について】

- 腹痛、頭痛、胸痛等があり、症状不変と報告されたが、最終的にどの症状が残存しているかは不明
- 起立性調整障害があり、症状不変と報告され、外来継続受診中。
- 倦怠感、息切れの症状があり、症状不変と報告されたが、最終的にどの症状が残存しているかは不明
- 接種直後からの左上腕の痛みがあり、現在も経過観察中となっている。

令和7年1月の本部会に不変として報告した症例のその後の経過について

令和7年1月の本部会において第1報としてご報告させていただいた、令和5年度にブロック拠点病院を受診した患者で臨床経過の情報を収集できた44人のうち、症状の経過を不変としていた4人について、その後の経過を収集した。

結果概要

【令和5年度にブロック拠点病院を受診した症例のうち、臨床経過の情報を収集できた44人の経過】

- 経過
- 消失

改善

不変

不明
- : 7人

: 28人

: 4人（*）

: 4人

（*）令和7年1月時点では経過が不変であった4人について

	令和7年1月時点における報告状況	その後の経過
症例1	ADLに影響がない程度の眼振残存	ADLには影響がない程度の眼振残存し、経過観察中
症例2	間欠的に生じる頭痛が残存	鎮痛薬にて改善
症例3	初診時、見えづらさ、頭痛、めまいの症状があり、症状不変と報告されたが、最終的にどの症状が残存しているかは不明	再診なく不明
症例4	疼痛、呼吸苦、倦怠感、歩行困難で受診し症状不変と報告されたが、どの症状が残存しているかは不明	頭痛、複視、歩行困難が残存しており外来経過観察中

令和5年度及び令和6年度にブロック拠点病院を受診した代表的な症例の経過について

令和5年度及び令和6年度にブロック拠点病院を受診した症例のうち、代表的と思われる症例について報告する。

症例 1

HPVワクチン1回目接種後から、接種側の肩の疼痛と可動域制限が継続しているため、ブロック拠点病院を受診。
肩MRI検査にて関節内の炎症所見を認めた。
NSAIDs（ロキソニン）を処方し、疼痛は改善した。

症例 2

HPVワクチン1回目接種直後は3日程度接種部位に疼痛を認めた。
その後、疼痛は軽快したものの、全身倦怠感が強くなり、登校困難となっていた。
HPVワクチン2回目を接種し、接種後にさらに倦怠感が増悪した。3回目のHPVワクチンも接種済み。
症状出現してから1年程度経過後にブロック拠点病院を受診。
複数診療科にて対応・精査を行い、ビタミンB12低値や、ヘッドアップチルド試験にて、立位8分程度で血圧低下等の他覚所見を認めており、ビタミン補充療法や、漢方薬等による治療を行った。
朝の倦怠感により登校困難のため、高校はリモート授業にて対応としていたが、高校卒業後は自動車学校へ通うなど、午前中も動けるようになってきている。

症例 3

HPVワクチン1回目接種後1か月以内に、頭痛、睡眠障害、全身倦怠感、脱力、文字が見にくい、日本語であっても長文が理解できない等の症状を認め、症状出現から3か月程度経過後にブロック拠点病院を受診。
複数診療科にて対応・精査を行い、右上下肢の筋力の低下や、腱反射の亢進、微熱の継続等を認め、HADSは11/13点、PDASは48点、PCSは43点であった。
漢方薬・片頭痛薬の処方、リハビリを行い、上肢の筋力低下は改善傾向にあるが痛みなどは不変である。

症例 4

HPVワクチン1回目接種直後から左腕全体（指先まで）のしびれと痛みを認めた。その後も力が入りにくい、腕を動かすに
く、触れられると痛いといった症状があり、スポーツもできなくなったため、ブロック拠点病院を受診。
左右の握力差、アロディニア、可動域制限、腱反射亢進、またMRIでは左上腕外側の炎症性変化を認め、鎮痛剤を処方した。
その後疼痛改善し、鎮痛薬を処方することなくスポーツも再開できている。

※症状の治療反応性や、症状の経過等については症例毎に大きく異なることについて留意が必要

令和5年度及び令和6年度にブロック拠点病院を受診した代表的な症例の経過について

症例 5

元々適応障害、過敏性腸症候群、月経困難症にて通院中であった。
HPVワクチン1回目接種後から、左上腕から肩周囲の痛みを自覚し、疼痛及び疼痛による、自動運動不足に伴う廃用症候群のため、ブロック拠点病院を受診。
初回受診時は疼痛及び廃用症候群に対して、リハビリ指導を実施するとともに、翌月に予約を取得し、疼痛が継続していなければ受診不要と説明し、再受診なく経過した。

症例 6

元々持続した頭痛があったが、HPVワクチン1回目接種後より頭痛が悪化し、通学が困難となっていた。
かかりつけ医にて起立性調節障害の診断を受け、内服治療としていたが、症状が継続するため、ブロック拠点病院を受診。
複数診療科にて対応・精査を行い、神経学的には明らかな異常所見はなく、片頭痛として治療を開始した。
また、うつ病の診断も得られた。
かかりつけ医にて治療継続する方針となり、ブロック拠点病院への通院は終了した。

症例 7

元々パニック障害がある方。
HPVワクチン1回目接種は問題なく実施したが、2回目接種後より疼痛自覚。
接種後に自覚した疼痛は一度軽快するも、再度疼痛を自覚した。
かかりつけ医にて鎮痛薬を処方されたが、その後も疼痛が継続するため、ブロック拠点病院を受診。
接種側の上腕や肩の安静時疼痛、可動域制限はないが、接種側上腕の動作時の疼痛を自覚していた。
血液検査にて、炎症反応の上昇も認めていた。
鎮痛薬、漢方薬の処方を行い、動作時の疼痛は改善した。

症例 8

HPVワクチン1回目及び2回目接種は問題なかった。
HPVワクチン3回目接種後に疼痛を自覚し、疼痛が数日経過も改善せず、
ブロック拠点病院を受診、複数診療科にて精査・対応を行った。
接種側の疼痛及び、可動域制限を認め、鎮痛薬等を処方し、疼痛及び可動域制限も改善した。

まとめ・今後

【まとめ】

- 令和6年度にブロック拠点病院を受診した患者のうち、臨床経過の情報を収集できたのは、13歳から27歳の女性合計90人であり、1回目接種後の方が最も多く61人/90人であった。
- 接種時に何らかの症状があったと確認されたのは52人/90人であり、38人/90人は接種時の症状はなかったと報告されている。受診のきっかけとなる症状は77人/90人が接種後1か月以内に症状出現していた。
- 62人/90人に「疼痛及び感覚の障害」を認めており、自覚症状の中では最も多かった。他覚所見又は検査異常が確認されたのは30人/90人であった。
- 治療内容は画一ではなく、薬物療法（NSAIDs、アセトアミノフェン、漢方薬、副腎ステロイド等）、肩関節腔内注射、理学療法・作業療法、鍼灸、臨床心理士による介入等が行われており、それぞれの医療機関において、それぞれの患者に応じた診療を行っていた。
- 令和7年1月の本部会において、症状の経過を不変としていた4人についてもその後の経過を報告した。
- 令和5年度及び令和6年度にブロック拠点病院を受診した症例のうち、8例の臨床経過を報告した。

【今後の研究】

- 本研究において得られた知見をもとに、「HPVワクチン接種後に生じた症状に関する診療マニュアル」のブラッシュアップを行い、接種後症状に対する医療体制構築に貢献していく。
- 症状が不変の方も含め、引き続き臨床症状をフォローする。